

ちよつと愉快な

仁王タン

写真文

津島修三

〈秋田市在住〉



失礼ながら、最初は何かの間違いでないかと思つた。

大きなお寺や神社では、参道に仁王門があつて一对の仁王像が祀られている。神聖な場に邪気を寄せ付けないのが仁王像の務めだから、小さな子どもが見たら怖がるくらいに、ことさら険しい形相をしているのが仁王像の常だ。

ここは仙北市田沢湖梅沢の金峰神社。創建は養老2(718)年、社殿炎上の歴史を経て現在地に遷宮、仁王門ですら今からおよそ150年前の安政4(1857)年の建立という、たいへん由緒のある神社だ。秋田県の天然記念物に指定されている樹齢400年ほどという参道の杉並木もなかなか見事なものだ。

それだけの由緒のある神社でありながら、あまたの寺社仏閣の険しい形相の仁王像とは一線を画す金峰神社の、すこぶる「ユニークな面体」の仁王像！

感したままを正直に言わせてもらえたら、まるで「子どもの工作」のようだ。いったい誰がつくつたのだろうと逆に興味をそそられるが、近隣の大工の手によるものらしいという言い伝え以外には正確な記録は残っていない。

金峰神社は牛馬畜産の神様で、三代続く神社の社守で梅沢集落在任の高倉萬六さん(81歳)によれば、戦前戦中には200戸の集落で60頭のウマを飼つていたという。神社の周囲は放牧場になつていたのだという。日が暮れるころになると神社の周りで草を食む自家のウマを連れ戻すのが、子どもたちの仕事だったのだとか。

今は地域内でも牛馬の姿を見ることはないが、それでも金峰サマの威光はなかなかのものである。重い病気を患った人が神社にお参りしたら医者に宣告された余命よりも長生きできたとか、お参りした受験生が全員合格を果たしたとか、萬六さんは誇らしげに語るのである。

そつえば、この仁王像には、股の下を三度くぐらせると子どもの健康増進に靈驗あらたかとの言い伝えがあるらしく、他では柵や金網で隔離されている仁王像も、ここでは引き戸で自由に中に入ることができる構造になっている。

金峰神社の仁王さんは、邪気を払うことよりも、人の命を育むことに思いを強くして、あのように柔和でユーモラスな面持ちでいらつちやるのか。

神社では、今年前半だけでも4組の結婚式を挙げているという。時代に取り残された忘れられた存在ではなく、今でも人々の暮らしとともに息づいている。心のよりどころなのである。